

伊能図探究 第十三号

伊能日本図探究会 渡辺 一郎

伊能図大発見

(十月二十六日各紙既報・本号二三頁参照)

国会図書館の伊能図

国立国会図書館は、地図室および古典籍室に、これまで伊能図六舗を所蔵してきた。

(地図室)

文化元年沿海地図小図(二二六×二五六センチ)

伊能測量当時の若年寄堀田撰津守旧蔵品で、堀田文庫の印がある針穴本。「伊能日本実測小図(一)」と題する。陸軍文庫の印もあり、同文庫にあったものが戦後国会図書館に移った。虫穴が多いが、彩色、文字など丁寧な仕上げで、付表、識語も完備する。沿海地図小図の優品である。堀田撰津守の旧蔵品で、針穴があるから、伊能忠敬からの謹呈品と推測される。文句ない副本である。折本。

文化元年沿海地図小図(二二四×二五六センチ)

伊能測量当時の勘定奉行中川飛騨守旧蔵品で、蔵書印がある。針穴のない写本。「日本沿海分間図 官撰 東国完」と題する。堀田図とは差があるが描図は丁寧である。彩色・描画形式は堀田図とやや異なるので、堀田図の写図ではない。余白が広く黄色を多く使う。神戸市立博物館蔵の沿海地図小図と同系統の描画である。市中より購入された。折本。

文化六年四国沿海図小図(五五×一〇五センチ)

文化五年の四国測量完了後、提出された小図である。「伊能日本実測小図(二)」と題する。陸軍文庫の旧蔵品で、沿海小図とセットで保管されていたもの。陸軍文庫以前の所蔵者はわからない。

描画・彩色とも優良な針穴本である。経線がなく、緯線を○・五度間隔に引く。虫・傷は少ない。伊能測量に近い関係にあった諸侯の旧蔵品ではなからうか。文化六年の四国沿海図小図の現存は、目下のところ、本図だけしかわかっていない。

(古典籍室)

カナ書き特別小図(一三〇×一一四センチ)三舗

蝦夷、東日本、西日本の三舗からなる。三舗とも同一寸法である。

標題は、「昌平校旧蔵 日本図」とある。蝦夷図と書いてあるのを朱筆で日本図と訂正してある。

高橋景保の製作で、シーボルトに渡されたが取り返したものであるという。蝦夷図は樺太と北海道を、東日本は尾張以東を、西日本は伊勢以西を描く。縮尺は小図の半分の八六万四千分の一。地名、国界、主な山岳と河川のみを記入、余白が多い。(伊能忠敬研究二二号参照)

幻の伊能大図が発見される

ところがこれらの国立国会図書館の伊能図に、最近新発見の最終版伊能大図模写図四三枚が加わることとなった。最終版の大図は二二四枚であるが、大部分が失われており、これまでに存在が確認されたのは、若干疑問があるものまでいれて、つぎの二二舗にとどまっていた。

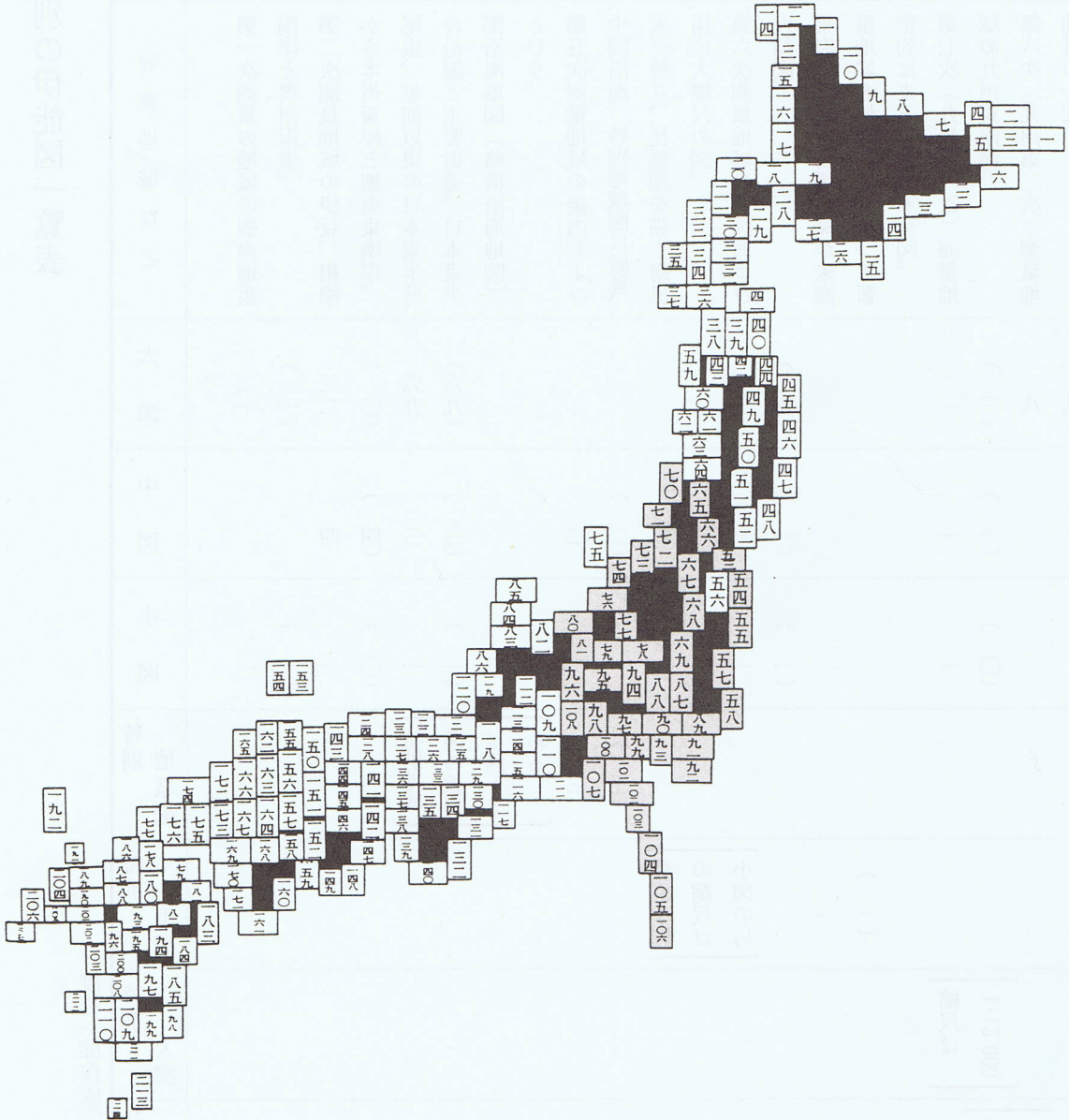
国立歴史民俗博物館 写本三舗 (飯山、赤穂、岡山)

山口県文書館 副本七舗 (赤間関、小郡、三田尻、奈古村、

熊毛玖珂、八代島、島嶼)

付図 このたび発見された伊能大図一覧

保柳睦美「伊能忠敬の科学的業績」331頁の伊能大図番号一覧表に表示した。



松浦史料博物館 副本六鋪(松浦、長崎、五島、小値賀、杵岐、平戸領)
海上保安庁水路部 模写図六鋪(安芸、筑後・日向、肥前・肥後、

豊後二、豊後・日向)

京都大学附属図書館蔵 針穴本七鋪(平戸、五島二、屋久島、

種子島、杵岐、対馬)

(注) 明治以降の複写図を模写図とした。図の描画範囲が最終版に一致しないもの、製作途中の試作らしきものもあるが、それらもすべて含めた。

それが四十三鋪出てきたのである。まさに大発見である。今回、明らかになった最終版大図の発見は、気象庁所蔵の江戸府内図北部二鋪を、気象庁から国会図書館に移管する途中で起こった。

国会図書館特別資料課長の鈴木純子氏(本会員)が移管の話合いのなかで、「このような地図もありますか」と云われ、大束の包を開いてみたら、伊能大図の模写図であったという。

国会図書館に移管されてから、筆者は、佐原市教委の青木氏とともに、確認のため四十三枚すべてを開いて点検したが、針穴はないものの、丁寧に何人かで筆写されたもので、間違いなく、これまでに見てきた最終版大図と同じであった。しかも、描図範囲は大図の一覧表とよく一致している。なかに一枚だけ、国立歴史民俗博物館の大図と完全に重複するものが見られた。

これまで、人に知られることなく所蔵されてきたため、なかのほうに巻き込まれていた図は開かれた形跡がすくなく、新品同様であった。あまりにもミステリアスな話なので愕然とした。

地図、包装材料に記録らしいものは全くなく、推測の域をでないが、本図はつぎのような経過をたどったものではなからうか。

明治六年二月に、伊能家から内務省地理局が最終版伊能図を借り出

して(後に献納、三百円を下賜)写したことが、旧陸軍参謀本部の陸地測量師・館彦彦(一八七一から一九〇五まで測量に従事、一九二七没)の日本測量野史稿(師橋辰夫「地図」九巻一号、一九七一収載)に記されている。師橋氏によると、館は、はじめ内務省地理局にいて、一八八四年に三角測量が陸軍に移管されるのにもない、参謀本部に移ったという。地図作成は内務省で始められたが、途中で旧陸軍にうつされ、そのとき人員・器材の大部分は陸軍に移った。

ただ、一部の要員が、気象台関係に残り、戦後気象庁にと発展してきたようである。これらの人達のなかには地図作りをやった人々もいたのではなからうか。あるいは、伊能大図を写したのはそういう人達だったかも知れない。気象庁はいまでも伊能図の他にも可成りの古地図を所蔵している。

本来は陸軍に引き渡すべき大図の写図をソット目立たぬ場所にしまつて置いて、事情を知る人がいなくなり、そのまま置き去られたのではなからうか。あることが知られていないのだから、見る人はいない。そのため、新しいまま今日に至ったのではないか。

なかに一枚(飯山)、国立歴史民俗博物館の所蔵図と等しい図があるから、写図されたのは複数枚で、その一部が残されたとも考えうる。発見された伊能図は大図であるから、測線周囲の描写は繊細で、富士山の山容、大山の参道の町並み、房総海岸の沿岸風景などが測線の位置までリアルに描き分けられている。

発見大図の番号は二九頁のとおりで、関東を中心に奥州南部から信越まで、東日本中央部を網羅して壮観である。参考のため、三〇・三一頁に作成時期別の伊能図一覧表を掲げた。

(本稿は国会図書館・鈴木特別資料課長、戸澤古典籍課長と立ち会い調査の際の資料、見聞にもとづいた私見である。)